

皇學館大学 ボランティアルーム

令和3年度 活動報告書



令和3年のボランティアルームを振り返って

ボランティアルーム担当教員
教育学部 叶 俊文

いつになったら収まるのか？それが一番の関心になっていることは、間違いないだろう。令和3年度も新型コロナウイルスの感染拡大に振り回されることになってしまった。

昨年度は学生スタッフのスキルアップを進めていくことに、目標を切り替えてボランティアルームは活動していった。その活動の中でも、「来年は活動できるようになるだろう」という観測的な思惑があったかもしれない。しかし、その思惑も春先から完全に吹っ飛んでしまうことになった。大学自体がオンライン授業を展開することになったためである。少人数の授業では対面で行われることになったが、まだまだ多くの授業でオンラインによる授業が進められた。その中で、どのようなことがボランティアルームにできるのかという模索があった。もちろん、ボランティアの依頼も無い状況である。しかし、学生スタッフは動き出してくれた。

その要因として、年度末に開催された年間報告会での外部の社会福祉協議会様からの多くの意見が参考になった。本学のボランティアルームだけにボランティアの依頼が無いのではなく、地域の社会福祉協議会でもボランティア依頼の無い状況のまま、活動の模索が行われていたことを知り、相互の意見交換が有意義なものになり、学生は息を吹き返していった。

コロナ下でもできることはある。まず、力を入れたのは情報の発信である。この一年間でも季刊誌の発行は行われた。ボランティア活動の報告はできなくても、ボランティアルームが行っていることや、ボランティアの意義などを季刊誌を通して学生に伝え続けた。また、SNSを通して、広く学生に訴えることができたと感じている。募金活動も続けられた。残念ながら令和3年度も各地で地震や集中豪雨による災害が発生した。被害にあった方々を少しでも支援するために、募金活動を行い日本赤十字社に寄付することもできている。毎年行われているペットボトルキャップの回収にも力が入った。コロナによるオンライン授業から、学生はmeetやzoomの使い方を理解し、そこにパワーポイントを載せる方法を理解した。そして、これらを利用して学生にオンラインでちょっとした講座を提供することもできるようになった。正に、スキルアップをしていったことになる。

これは「何もできない」から「何ができるのか」を考える必要があると話してくださった年間報告会に参加してくださった社会福祉協議会様からの言葉が励みになったと考えている。学生スタッフもそうだが、私自身も発想の転換ができたように思っている。感染拡大の波がいつまで続くのかはわからないが、今年になって「できること」を試行錯誤してきた学生スタッフたちはまた一つたくましくなったのではないかと考えている。

今できることを考えていこう。それが自分たちの力となり、ボランティアの依頼を受けることができるようになった時に発揮されると思っている。

1. コーディネート状況報告

令和3年度ボランティアコーディネート 活動報告

1. 目的

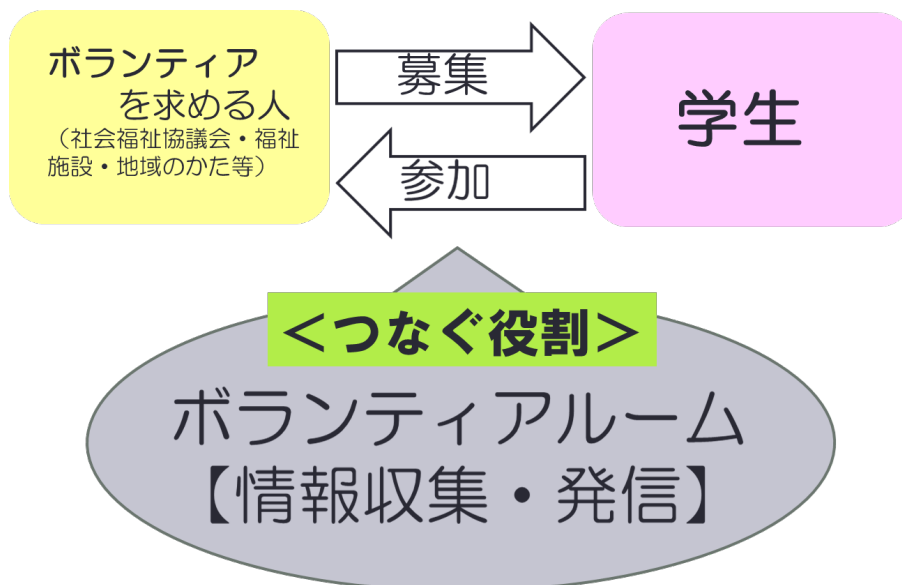
皇學館大学ボランティアルームでは、ボランティア活動を希望する学生の支援を目的として活動している。ボランティアルームに所属する学生スタッフが、ボランティアをコーディネートすることを中心に考えて活動をしている。そこで、ボランティアコーディネートについて今年度の活動を報告する。

2. コーディネート活動内容

ボランティアコーディネーターとしての学生スタッフの活動は、地域から依頼されるボランティアを受け付け、学生にボランティア情報を提供することで、地域と学生を繋ぐことである。

学生へのボランティア情報提供の方法は、主に2号館1階ボランティアルーム横と6号館1階の掲示板への掲示、メール登録者へのメール配信である。しかし、近年メール登録者数が減少しており、登録していてもメールをなかなか見ないという学生の声を聞いたことから、令和元年度からメールに加え、さらに手軽にボランティア情報が手に入るようにとLINEでのボランティア情報配信を開始した。その他にもTwitter（ツイッター）やInstagram（インスタグラム）での企画ボランティアの発信や、平成28年度より行っている月別ボランティアに参加への情報発信をすることで学生の参加促進をねらっている。

<ボランティアルームの仕組み>

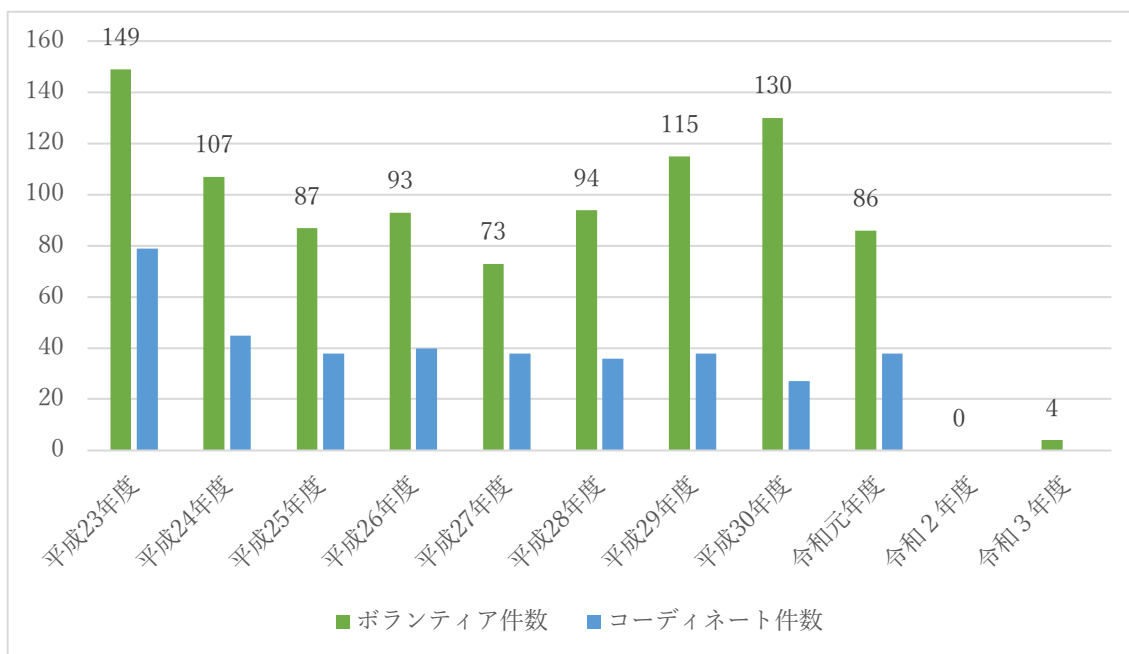


ボランティアコーディネートを学生スタッフが行うことにより、気軽にボランティアに参加することができ、学生のボランティアの参加をより促すことができると考えている。学生スタッフがボランティアコーディネートをを行うにあたって、気を付けなければならないこともある。それは、地域と学生の関係を対等かつ互いが成長できる関係へと調整することである。円滑にコーディネートをを行うために、学生スタッフ一人ひとりがボランティア先とはもちろんのこと、参加学生と連絡を取り合うことへの責任や意識を持ち、活動に取り組んでいく必要がある。

3. コーディネート状況

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、地域から依頼されたボランティア情報件数は4件であった。

前年度までのボランティア依頼件数とコーディネート率を比較すると以下の通りである。



ボランティア依頼件数は前年度に比べ4件に増えたが、以前に比べるとかなり減っている。これは昨年度同様、新型コロナウイルス感染症の影響により多くの人が集まる催し物が開催できなかったことや、人と人との接触を控える傾向が社会的に多くみられたことが理由として考えられる。この結果を踏まえ、ボランティアルームとして新たな生活様式に合わ

せて活動を行い、引き続きボランティアの魅力やその喜びを新たな学生に伝えボランティアの輪を広げていく必要がある。そして、ボランティア活動がいつ再開しても活動が円滑に行うことができるように、学生スタッフ一人ひとりのスキルや意識を維持していくことが大切であるとする。

4. ボランティア登録学生についての詳細

ボランティア登録学生からみるコーディネートを分析する。今年度のLINE登録数は44人であった。メールの登録を廃止したため、計44人となった（昨年より16人増）。

この人数となった原因としては、昨年度同様、新型コロナウイルス感染症により、例年4月に行われていた各学年のガイダンスが中止となったことによるアピール不足や、ボランティアルームとして校内での活動が困難であったことが挙げられると考える。

例年ガイダンス後にはメール登録用紙の回収や、LINE登録を行っていた。ガイダンスの際にメール登録やLINE登録の存在を知り、登録をしているという声も耳にする。ガイダンスの際には、各学年に合ったDVDも上映している。実際にガイダンスを通してボランティアに興味を持ったという学生もみられる。ガイダンスでアプローチができなかった点が、要因であるといえる。同時に、ガイダンスが学生に登録を促すための大きな行事であることを再認識し、ガイダンスでの取り組みを良いものにしていく必要があるだろう。

一方で、ガイダンスに頼らない、SNSのアピール方法を考え、実施していく必要がある。また、ガイダンスで流していた映像をボランティアルーム前でも上映する等の取り組みを行っていくことが必要であると考えられる。

5. 今年度のボランティアルームとしての活動

今年度も昨年度同様、新型コロナウイルス感染症の影響により、ボランティアに参加することは困難であった。そのため、学生スタッフが自らのスキルアップを目指す活動を企画し、開催した。ボランティアルームの活動の中心であるコーディネートについては、ボランティアルームスタッフ全員で、いつでも円滑にボランティア活動を再開できるように活動内容を見直し、改善しながら活動を進めた。主に手話講座やパラスポーツ体験などを開催してきた。これらの活動の詳細は後の報告で担当が述べる。

今年度のボランティアルーム活動の特徴として、スキルアップを上げることができる。ボランティアに参加できないから動かないのではなく、この機会だからこそできることを

企画し、スタッフのスキルアップに力を入れた。福祉に関する様々な経験や学習を行ったことで、日常生活においても役立てることだろう。次年度では、コーディネートを経験していないスタッフが大半になってくる。そのため、ボランティアの楽しさを伝えて身近に感じてもらうという本来のボランティアルームの形を忘れず、ボランティアの良さ・素晴らしさを一人でも多くの学生に伝えるということを念頭に置いた上で、新たな生活様式に合わせた活動を行っていかねばいけない。

今後も、新型コロナウイルス感染症の影響によりボランティア活動に参加できない状況が続くと考えられる。引き続き、学生スタッフのスキルアップを目指していくことはもちろんのこと、この状況で行うことができる活動を模索して、世の中の動きに順応していかねばならない。そして、ボランティアが再開した時にすぐに動けるよう、スタッフ間はもちろんのこと地域の方と情報を共有していくことが重要である。ボランティアルームスタッフ全員の意思確認をしっかりと行い、一人一人の行動力を大切に活動し、改めてボランティアと向き合っていきたい。

【文責：文学部コミュニケーション学科4年 吉田綾奈】

2. ボランティアルーム企画・活動報告

令和3年度7月大雨災害義援金募金 活動報告

1. 目的

募金班は、募金を通して、大雨や台風、地震などで被害を受けた地域の復興の手助けをすることを目的に活動している。

今年度は、7月に発生した大雨により静岡県を中心に甚大な被害が発生したため、ボランティアルームから少しでも復興の手助けができるよう、大学で募金活動を実施した。

2. 活動内容

実施日：7月27日(火)・7月29日(木)

活動時間：12時40分～13時10分

活動場所：倉陵会館1階食堂前・6号館入口付近

スタッフ：6名

3. 活動報告

令和3年7月に静岡県を中心に大雨による災害が発生した。そこで募金班は1日でも早い復興のため大学内で募金活動を行った。活動場所は、昼休憩の時間に教員や学生が多く訪れるということから、食堂前と6号館の入り口付近で行った。また、本来であればボランティアルームのスタッフ全員から参加を呼びかけたかったのだが、コロナウイルス感染拡大の防止のため、今年度は募金班のスタッフ内6名で行った。少ない人数での活動であったため、募金への協力をしっかり呼びかけることができるのか心配だったが、2日間の募金活動を通して合計11,427円を寄付することができた。(金額の詳細は表に示す)

また、募金活動を行う前に、ボランティアルームのスタッフに協力してもらいながら、何に対する義援金なのかについて記載された募金箱と看板を作成したり、事前にSNSを通して、いつ・どこで募金活動をしているかについての情報を学生に発信したりと事前準備も綿密に進めた。

	食堂前	6号館入り口付近	合計
7月27日	6064円	2488円	8552円
7月29日	1580円	1295円	2875円

4. 活動風景



食堂前



6号館入り口付近

5. スタッフからの感想や意見

- ・人通りは少なかったが、その中でもたくさんの人が募金をしてくれてありがたいと感じた。
- ・たくさんの人の思いが集まれば、とても大きな力になることが分かり、募金活動をしていくことの重要性を感じた。
- ・活動をしていて「こんな募金があったんだ、知らなかった」という声が聞かれたことから、募金班が先手に立ち呼びかけていく必要があるのではないかと思った。

6. 今後の展望

今回の募金活動を通して以下の2つが課題として挙げられる。1つ目は、募金に対する意欲をどう促していくかである。スタッフからの感想でも挙げられていたように、募金に関する情報が学生の中で乏しいのではないかということ、募金に対する意欲はあるが調べる機会がないということが考えられる。そこで、これまで募金班は募金を募る活動を中心に行ってきたが、今後は学生向けに募金に関する情報が記載されている掲示物の作成を行うなど、ボランティアルームだけにとどまらず、学生も一緒になって募金に対する意欲を高めていきたい。2つ目は、災害に関する募金だけでなく、様々な支援を必要とされている方々のために活動範囲を広げていけるのではないかということである。例年募金班は、災害が起きた時に募金活動を行ってきたが、視野を広げてみると募金班ができる活動は他にもあると考えられる。そのために、まずは募金班が主体となって、自分たちに今何ができるのかを真剣に話し合う機会を設けていきたい。また、募金や寄付は今よく耳にするSDGsの目標を達成するためにできることの1つでもある。やはり、そのためにも、募金班が先手に立ち、真剣に考え、勉強し、そこで得た知識を発信していくことが重要であると考えられる。

最後に今回の募金活動を通して、計 11427 円の金額が集まり、日本赤十字社を通して被災地に寄付することができた。この集まった寄付金が、被災地復興の手助けになれば幸いである。

【文責:教育学部 教育学科3年 池下日和】

手話講座 活動報告

1. 目的

手話講座は、サマースクールが新型コロナウイルスの影響により中止となったため、その企画の一つであった手話をボランティアルームスタッフにレクチャーし、みんなでスキルアップしようという考えで始まった。

この講座では、手話について学ぶと共に、聴覚障がいのある方が日常生活で感じる困難さと、その手助けをする方法について知ってもらうことを目的とした。

2. 活動内容

手話講座はサマースクールスタッフで動画を撮影し、ボランティアルームの LINE グループでオンデマンド配信を行った。一般学生に向けては SNS で動画を公開した。撮影にあたり、事前にモニター、教室の使用許可を得た。手話の紹介では、意味や手の動きに興味を持ってもらえるよう一つずつ解説を行った。天気、遊ぶ、買うといった日常生活の手話の紹介を行った。前回の感想で「季節やイベントに関係する手話を学んでみたい」という意見があったため、今回はハロウィンの手話を追加した。講座の最後に聴覚障がいのある方が日常生活で感じる困難さを伝えると共に、耳マークや電話お願い手帳の紹介を行い、手助けする意識を持つことを呼びかけた。

動画公開日：10月30日（土）

撮影場所：皇學館大学 511 教室

- 内容：(1) 挨拶
(2) 前回の復習
(3) 手話・指文字の紹介
(4) クイズ
(5) 耳マーク・電話お願い手帳の紹介
(6) 終わりの挨拶

企画者：4年 西出美郷、村嶋大輝、吉田綾奈

3年 坂谷海怜、土性奈々香、松岡克佳

2年 田中ゆ衣、橋本彩花

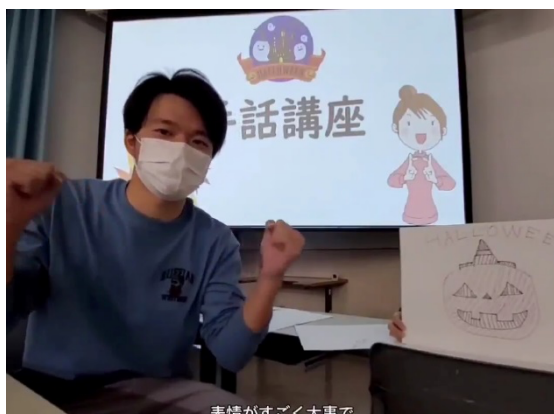
1年 井坂安寿、石井陽菜、大倉すず、近藤朱莉、篠原広樹

3. 活動報告

新型コロナウイルスの影響によりボランティアルームスタッフの対面での参加はなしとし、動画をオンデマンドで配信した。撮影参加人数は8人、感想を送ってくれたのは15人であった。内容は、まず前回の復習を行い、挨拶、ハロウィン、天気、日常生活の手話の紹介を行った。次に、イラストや表を用いて手話、指文字のクイズを行った。最後に、

聴覚障がいのある方が日常生活で感じる困難さを伝えると共に、耳マークや電話お願い手帳があることを伝え、お願いされたらどうすればいいのかという方法を紹介した。

4. 活動風景



5. 参加学生の感想

- ・聴覚障がいのある方に街で出会った時に動画で出てきた手話を使って関わられるようになりたいと思った。
- ・聴覚障がいのある方に寄り添えるように手話を始め色々なことを学んでいかなければいけないと感じた。
- ・耳マークや電話お願い手帳について学び、困っている方を見かけた時に行動ができるきっかけを掴むことが出来た。
- ・クイズ形式の部分が遊びみたいで楽しかった。
- ・字幕が付いていて音がなくてもわかるようになっていて良かった。
- ・手話の種類が多くて驚いた。
- ・動画の後半部分が進むのが早かった。
- ・クイズの考える時間が短かった。

- ・手話の紹介で具体的な説明があつて分かりやすかつた。
- ・前回の復習で忘れていたことも思い出せてよかつた。
- ・指文字表が小さくて見つらかつた。
- ・指文字クイズが難しかつた。
- ・手話の画角からの見切れが気になつた。

6. 反省・まとめ

困っている方を手助けする意識を持ってもらうという目的を達成することが出来た。字幕や手話の説明があることで理解しやすかつたという意見が多かつた。手話について、話し合ひで動画は対面で見るとより小さくなつてしまうため、詳しい説明を入れたいという意見があり、それを反映し、分かりやすく伝えることが出来た。指文字クイズについて、サマースクールメンバーで話し合つた結果、指文字を覚えるのは難しいだろうという結果になり、指文字の表を添付してクイズを当ててもらふという内容にした。しかし、いきなりクイズをする方が難しかつたということが分かつた。話し合ひの際、指文字の説明には時間がかかると意見があつたが、動画を何本かに分けることで見ている人の集中力を持続させることが出来たのではないかと考える。クイズの考える時間が短かつた、指文字表やイラストが見つらかつたという意見に対しては、PowerPoint を作る段階で直接イラストを入れると良かつたと感じた。イラストを書いていると手間がかかつてしまうため、必要な部分は効率的に進めることが大切だと感じた。手話の画角からの見切れが気になつた、動画に切りかえのシーンが欲しかつたという意見に対しては、撮影や動画と編集に関する内容であると感じた。これに対しては、動画を何度か撮影して見直し、練習をしたり、話し合ふ必要があつたと感じた。

全体を通して、伝えなかつた内容を伝えることは出来たが、見直しや話し合ひが足りておらず、さらに改善する余地はあつたと考える。前回、話し合ひが足りていなかったため、今回は話し合ひを増やし役割分担をするようにしたが、ある程度企画が決まってくると話し合ひが減つてしまつた。企画の内容が決まつたとしても、その内容や完成した動画について話し合ふ必要があつた。企画の全ての工程が終つた後にも全員で話し合ひ、見直しをすることで企画の完成度を上げていきたい。

【教育学部教育学科3年 田中ゆ衣】

くらたやま企画 質問会 活動報告

1. 目的・目標

今年度も新型コロナウイルス感染症のクラスター発生を懸念して、昨年度の様に音楽祭や文化祭といったイベント企画を行わなかった。昨年度は勉強会を行ったので、それを参考に今年は質問会を行った。目的は以下の2つである。

- ① コロナ禍での高齢者や認知症の方が居る施設の取り組みを知る。
- ② 昨年度の勉強会で学んだ事を深め、新たな学びに繋げる。

この2つの目的を果たすために、企画メンバーから具体的な質問を出し、くらたやま職員さんに解答をもらう形での交流をした。

2. 活動内容

昨年度よりもコロナの感染状況が悪化したため、対面で活動する事は出来なかった。そのため、今年度はオンラインで質問会を行った。質問内容は、主に施設での取り組みに関するものがほとんどであった。

3. 活動報告

今回の活動では、活動範囲を企画メンバーに絞って行った。具体的な質問と対する解答を、以下で簡単にまとめていく。

・今年から始めた取り組みはありますか？

→敬老の日にイベントを行いました。利用者の方へ家族の元気な姿を見せるためのビデオレターや、懐かしさを感じられるおやつやクイズで楽しんでももらいました。

・面会について気を付けている所は何ですか？

→基本的な感染対策をした上で、時間を決めて面会を行っています。難しい時期は、ビデオ通話をする事や家族の方の協力で元気な姿を写真や動画でみる事をしています。

・楽しませる工夫は何ですか？

→季節や行事を意識した手作りおやつに取り組んでいます。

・高齢者の主体性を尊重するために何をしていますか？

→「夢を叶えるプロジェクト」を行っています。利用者の夢を叶える事で尊重しています。

4. 参加学生の声

・季節を感じられる取り組みは、利用者さんも楽しめて開催する側も楽しめそうで良いと思った。

・全ての取り組みで、使用者の方を第一に考えている気持ちが伝わってきました。

・夢を叶えるプロジェクトはいくつになってもやりたい事がある、その想いに向き合う企

画だと思いました。

- ・利用者さんが、直接家族に会えなくても笑顔になれる様な取り組みが素敵でした。

5. まとめ

今年度も、コロナの影響で今までの様な企画が行えなかった。そのため、活動の中心を昨年度同様にスタッフとくらたやま職員さんの交流にした。しかし、これ以上の交流は難しいものになるため、来年度では本来の企画の姿に戻していく必要がある。対面以外の方法で、利用者と交流するにはどうしたら良いか考えるべきだ、とスタッフからの声も多かった。

今回の質問会は、結果として目的を達成する事が出来た。昨年度の勉強会では、聞く事の出来なかった更に具体的な話を、質問形式で教えてもらう事が出来た。利用者の方を楽しませるための取り組みや意識する事は、これからのくらたやま企画で活かしていこうと思う。

【文責 教育学部教育学科3年 小芝実結】

倉陵祭担当(パラスポーツ)活動報告

1. 目的

この活動を行う目的としてまず、「障がいをお持ちの方への理解を深める」というのが挙げられる。我々ボランティアルームスタッフは、ボランティア活動の中で身体に障がいを抱えた方と接する機会がある。次に、「スタッフ間の交流を深める」というのも目的の一つである。本年度も新型コロナウイルスの影響を受けて新入生歓迎会などの交流の場がなかったため、他学年はおろか、新入生のスタッフ同士がお互いに認知できていない状態にあった。今回の企画によって、少なくともチーム内での交流は必須であるため、我々スタッフ同士の交流を深めることができると考えた。

2. 活動日時・場所・参加人数

令和4年1月7日(金)

皇學館大学体育館 サブアリーナ二階

参加人数 17人(スタッフのみ)

3. 活動内容

次のような形で試合を行った。

- ・ 1チーム: 3~4人、計5チーム
- ・ 試合時間: 10分
- ・ コロナ対策として空気の入れ替え、消毒液の設置と道具の定期的な消毒をするよう声掛けをした。また、参加者には当日の検温も行った。

4. 参加者の意見

- ・ チームの皆と作戦を立てて協力し合うことができメンバーとの仲が深まりました。
- ・ 普段できない貴重や体験ができた。
- ・ 運動神経の良し悪し関わらず楽しめた。
- ・ 他のパラスポーツにも興味が湧いた。

5. まとめと感想

今回でパラスポーツ体験を行うのは2回目だったがこれからも続けていきたいと感じた。次回からはスポーツを始める前にどのような障害のある人に向けたスポーツなのかまた、障害についての概要を説明する時間を設けたいと感じた。

【活動の様子】



【文責：現代日本社会学部現代日本社会学科4年 河俣太一、行方洸太】

季刊誌 活動報告

1. 目的

季刊誌は学生用と外部用の 2 種類を作成しており、ボランティアルームの存在や活動内容、ボランティアについての情報発信を目的としている。

学生用の季刊誌にはボランティア情報や福祉に関する知識の説明を入れることで、初めてボランティアに参加する方やボランティア経験者の方、ボランティアに興味がある方などあらゆる学生にボランティアへの参加を促すことができるような内容にしている。

外部用の季刊誌は社会福祉協議会等を通じて配布しており、ボランティアルームの概要や活動内容を中心にボランティアルームの存在や活動を知ってもらえるような内容にしている。

2. 活動内容

季刊誌を発行するにあたり、それぞれの担当者と相談しながら年間予定を立てた。各担当同士で情報共有をしながら、学生用(夏号・秋号・冬号)3号、外部用(夏号・秋号・冬号)3号を発行した。学生用は昨年度の発行数を引き継ぎ、今年度も 30 部発行することに決定した。昨年度から引き続き、福祉やボランティアに関する知識、各企画などを掲載し、ボランティアに興味を持ってもらえるような内容にした。

外部用の季刊誌は夏号を三重県社会福祉協議会、松阪市社会福祉協議会、伊勢市社会福祉協議会、伊勢志摩バリアフリーツアースセンター、四日市市社会福祉協議会の 5 団体へ向けて 10 部ずつ配布した。秋号からは松阪市社会福祉協議会、伊勢市社会福祉協議会、伊勢志摩バリアフリーツアースセンター、四日市市社会福祉協議会、玉城町社会福祉協議会へ 10 部ずつに加え、三重県社会福祉協議会へ 70 部発行した。新型コロナウイルスの影響によって行動ができなくなったことによる学生スタッフのスキルアップ活動の様子や学生スタッフへのインタビューやボランティアルームの紹介、ボランティアの依頼方法などを掲載した。

学生用を発行する際には、Instagram や Twitter などの SNS を通じてアカウント班によりアプローチを行った。昨年度と同様に季刊誌に対する学生の反応を知るためにアンケート班に質問の依頼をした。

3. 活動報告

学生用	発行予定月	発行月	発行部数
夏号	5月	8月	30部
秋号	9月	12月	30部
冬号	11月	2月	30部

今年度も2号館1階のボランティアルーム前と6号館1階の掲示板に設置して、学生が自由に手に取れるという形で配布した。学生用は残部が多かった為、配布方法やアプローチ方法について検討していく必要があると感じた。

今年度も昨年度と同様に、発行予定の時期を早めに設定したが、新型コロナウイルスの影響により、作成・発行・配布が遅れてしまい、当初の発行時期から大幅にずれてしまった。そのため、担当者同士での話し合いが制限されている中で、積極的に情報共有をしていくことが必要だと考えた。担当者だけに任せるのではなく、企画内で作成段階や内容の共有を増やしたり、学生スタッフ全体にどのような内容を季刊誌で取り上げて聞いてみるなどの改善が必要だと感じた。

4. 反省と課題

1) 発行部数について

今年度も昨年度と同様に Instagram などの SNS を利用してアプローチをかけたがあまり効果は見られなかった。他のアプローチ方法や掲載方法を担当者と検討していく必要があるのではないと思う。

外部用については配布団体が増え、人の目に触れる機会も増えていくと思うので、各社会福祉協議会と相談しながら掲載方法等を検討していきたい。

2) 内容について

より良いボランティアの情報誌を目指していくために、学生用は社会福祉協議会や他大学のボランティア活動をしている団体のボランティア情報誌から良いものを吸収して、知りたいと思える情報や掲載方法を季刊誌の担当者を中心に深く思索していきたいと思う。今、学生がどのようなボランティアの情報を求めているのかアンケートを重ねて検討していきたい。

外部用には昨年度と同様にボランティア経験者や、学生スタッフに対するインタビューを引き続き掲載していくのが良いのではないかと考えている。

3) 配布方法について

今年度も今までと同様に紙媒体のみで季刊誌を発行してきたが、Instagram や Twitter などの SNS での情報発信が活発になってきているため、PDF を用いた電子媒体でも掲載し、携帯やパソコンからでも気軽に季刊誌を読むことができるよう、担当者と考えていきたい。

学外用については今年度から配布先が増えたため、これからも配布個所を増やすために担当者と努めていきたい。

5. まとめ

今年度は昨年度のものを参考に掲載内容などを担当者で考えた。掲載内容や配布方法については改善点が多くあると考えている。また、企画内で集まって話し合う機会が少なかつたため、積極的に交流を図り、季刊誌をより良いものにできるように努めていきたい。「見やすい・分かりやすい・読みやすい」を追求し、見る人のニーズに合った季刊誌を目標にしていきたい。

【文責：教育部教育学科 3 年 大森萌花】

エコなおもちゃづくり 活動報告

1. 目的

伊勢市社会福祉協議会のげんこころ一むと共催で行われた企画である。

この企画では、ペットボトルキャップを再利用してマグネットを作るという簡単なリサイクル体験を、げんこころ一むに訪れた参加者の方に行ってもらうことを目的としている。また、ボランティアとしてこの企画をサポートする大学生については、げんこころ一むの方や参加者の方との交流を通して、様々な世代の方との接し方を学んでもらうことを目的としている。

2. 活動内容

ペットボトルキャップで「ねこ」「はち」「てんとうむし」のマグネットを作成できるように準備した。このマグネットの作成のサポートを参加学生には行ってもらった。また、げんこころ一むに訪れた参加者の方とのコミュニケーションをとってもらい、お互い楽しみながら活動を行った。企画の開催時間は全体で6時間あったため、参加学生4、5名で2時間ごとに交代しながらサポートを行った。

開催日：令和4年1月15日（土） 10：00～16：00

場所：伊勢市社会福祉協議会サテライト「げんこころ一む」
（イオンタウン伊勢ララパーク2階）

内容：①10時～12時

②12時～14時

③14時～16時

の3つに分け、参加学生約5名で2時間ずつマグネット作りのサポートを行った。

企画者：3年 勝又未結、川端日南果、黒田結規、須場聖羅、土性奈々香、西優一、濱口英太、村林凌樹、八尾幸哉

3. 活動報告

新型コロナウイルス感染予防のため、当日の呼び込みは行えなかった。しかし、親子2組と若い方々1組の計3組にマグネット作りに参加していただいた。ボランティアとしてマグネット作りのサポートを行った参加学生は、一般学生1名、ボランティアルームスタッフ13名、伊勢市社会福祉協議会ボランティアセンター登録者1名の計15名であった。参加者の方や参加学生には当日検温をしてもらい、作業する机の中央にはアクリルのパーテーションを設置した。

あらかじめ黒、黄、赤に塗ったペットボトルキャップを用意した。参加者の方には、作り方の書いた紙を見てもらいながら、フェルトや動眼などを貼り付けて「ねこ」「はち」「てんとうむし」のマグネットを作成してもらった。「はち」や「てんとうむし」の作成過程には、触覚に見立てたワイヤーをペットボトルキャップに差し込むことが必要となる。そのためには、ペットボトルキャップに目打ちで穴をあける必要があるが、その時は参加学生が小さい子どもに代わって穴をあけるなどのサポートを行っていた。小さい子どもたちも、ハサミを使ってフェルトを必要な大きさに一生懸命切っていた。そして、完成したマグネットを喜びながら母親に見せに行く姿を見ることができた。

午前中は参加者が訪れなかったため、参加者と学生の交流は行えなかった。しかし、その間に学生間での交流は行えた。他学年と関わる良い機会にもなったのではないかと思う。

4. 活動の様子



「はちのマグネット」の作り方



5. 参加学生からの声

- ・呼び込みができない中で参加してもらうのが難しかった
- ・普段何かを教えるという機会がなかったため少し伝え方が難しかったと感じたが楽しめた
- ・身近なペットボトルキャップから作れるため子どもも家で楽しめそうだった
- ・参加してくれる人が増えるにはどのような工夫が必要なのか考えなければいけないと思った
- ・作る種類をもう少し増やすと、より楽しめるのではないかと

6. まとめ

小さい子どもたちが楽しみながら参加していたことから、リサイクルに触れる良い機会になったのではないかと考える。また、参加学生としても、小さい子どもに対して作業をどこまで手伝えば良いのか、どのような声かけが必要なのか学べる良い機会になったのではないと思う。また、若い方2名にも参加していただいたが、その方々は作り方を用意した3種類のマグネット以外に別のキャラクターを作成していた。作り方が用意されたものだけでなく、自由に考えて作るという楽しみ方もあるのだと、自分自身の勉強にもなった。今後機会があれば、より参加者の自由な発想を引き出すために材料の種類を増やすことも検討したい。

「参加学生からの声」にもあったが、参加者が3組と少なかったため、宣伝の仕方を今後工夫する必要がある。げんこころ一むさんにも協力していただき、情報を発信していくと良いのではないかと考える。

この企画は、ボランティアルームだけでは行うことができなかった。げんこころ一むさんから時間やスペースをいただけたおかげで行うことができた企画である。ボランティアルームを支えてくださる方々に感謝しながら、これからも活動を行っていききたい。

【文責：現代日本社会学部現代日本社会学科3年 須場聖羅】

3. アンケート報告

令和3年度アンケート結果報告

1. 目的

今回のアンケートは『新型コロナウイルスの流行を受け活動が困難な状況の中でボランティアルームとして学生とどう関わっていくかを図る』、『ボランティア活動によりどんな力が付くのかを理解し、今後の活動に活かしていく』の2つを目的として調査を行った。

2. 活動内容

今年度はアンケートの回答をすべて Google フォームに統一し、回答ページへの URL を各学年・学科のグループ LINE に送付した。昨年は紙媒体のものを講義で配布していたが、今年度は新型コロナウイルスの影響により休講だったため、LINE を使用した。

今年度は昨年に比べるとボランティアを行うことができた。そのため、昨年度までのアンケート項目に加え、新しいアンケート項目として、ボランティアに参加するとどのような力を培えるかなどの、実際にボランティアに参加したことを想定した項目を追加した。また、本学の学生がボランティアに何を求めているのか、ボランティアルームは学生とどのような形で関わっていくべきかなど、ボランティアルームの指針に関する項目は昨年度のままにしてアンケートを行った。

アンケートの実施は以下の通りである。

開催日：2022年1月18日～1月28日

対象者：教育学部 約300名

文学部 約200名

現代日本社会学部 約150名

合計 約650名

方法：Google フォームでアンケートを作成。また、Google フォームのリンクを載せた URL をボランティアルームスタッフが所属している各学年・学科の LINE グループにて送付。

アンケート内容：アンケート項目は以下の10項目である。

- ① 学年・学科
- ② ボランティアルームの認知度
- ③ ボランティアルームの活動内容
- ④ 季刊誌の認知度
- ⑤ ボランティア情報の入手方法
- ⑥ 今年度のボランティア参加率
- ⑦ 今年度参加してみたいと思うボランティア

- ⑧ 参加したいボランティアの具体的意見
- ⑨ 今後参加してみたいボランティアの分野
- ⑩ ボランティアに参加することによって、何が得られると思うか
- ⑪ ボランティアルームへの意見、要望、改善点

3. 結果報告

教育学科約 300 名、国文学科約 80 名、神道学科約 50 名、コミュニケーション学科約 70 名、現代日本社会学科約 150 名の合計約 650 名にアンケートを行った結果、得られた回答数は 47 件だった。昨年度のアンケートは 202 件で、一昨年のアンケートは 18 件であり、昨年度よりは、件数が減少した。

今回得られた 47 件の回答は、新型コロナウイルスの状況下におけるボランティアルームの活動に関わる貴重な意見である。

以下、得られた結果を順に示していく。なお【複数回答可】のある項目はグラフの割合が全体（47 件）に対しての回答数なので、合計しても 100%にはならない。

① あなたの学年を選んでください。

1 年	53.2%
2 年	8.5%
3 年	27.7%
4 年	10.6%

①—2 あなたの学科を選んでください。

神道学科	6.4%
国文学科	4.3%
コミュニケーション学科	8.5%
教育学科	42.6%
現代日本社会学科	38.3%

学年は「1 年生」「3 年生」「4 年生」の順に多く、学科では「教育学科」「現代日本社会学科」が他の学科によりも抜き出て多い結果になった。

今回のアンケートでは、急遽、新型コロナウイルスの影響ですべての講義が休講になったため、Google フォームへの URL を LINE グループで送付する形で行ったが、講義内で QR コードを載せた用紙を配ることができたら、更に多くの回答数を獲得することができたと考ええる。次回のアンケートからは、早い時期から準備を始め、急な出来事にも対応できるようにしておくことが必要だと考える。

② ボランティアルームを知っていますか。

はい	95.7%
いいえ	4.3%

②-2 「はい」と答えた方に質問です。メール配信やSNSなどでボランティアルームを登録していますか。

登録している	38.6%
登録していない	61.4%

ボランティアルームの認知度と登録の項目では、認知度は「知っている」が多数、登録は「登録していない」が約60%という結果となった。

今年度はガイダンスでの紹介ができなかったため、1年生などにボランティアルームを知らない学生が多いと予想していたが、回答の約96%は「ボランティアルームを知っている」と回答している。知らないと回答した約4%の学生にボランティアルームを認知してもらえるよう、掲示物の更新や、SNSでの活動報告など、情報の拡散をより積極的に行っていくべきである。

登録に関しては、ボランティアルームに登録する機会が少ないことと、「ボランティアルームを知っている」と回答した学生が多かったにもかかわらず、「登録していない」と答えた学生が多かったことが課題である。

登録の機会に関しては、ボランティアルームの登録はガイダンス資料のパンフレット、ボランティアルーム横と6号館の掲示がある。また、ボランティアルームに足を運び、そこで初めて登録するというパターンもある。このことから、ボランティアに興味がある学生であっても、一度機会を逃せばボランティアルームに登録しないままにしていると考えられる。「ボランティアに興味が無い、あるいは自分には必要ない」と考える学生に対しては、ボランティアに参加することで得られるメリットを提示することが必要である。「面接でアピールできる」や「エントリーシートに書くことができる」など、直接学生の利益になるような呼びかけも考えていかななくてはならない。

また、ボランティアルームの正確な情報を伝えるために、説明会を開くことが必要である。少しでもボランティアルームのことを知る機会を作るようにしていくべきであると考えられる。ガイダンスでの宣伝が縮小されてしまっている現在の状況だからこそ、新しい登録の機会をボランティアルームスタッフ内で考えていく必要がある。

③ ボランティアルームの活動、広報活動を SNS などで見たことがありますか？

見たことがある	53.2%
見たことがない	46.8%

ボランティアルームの活動、広報活動を SNS などで見たことがある人とない人の割合がほとんど同じだった。このことから、ボランティアルームの存在は知っているが、ボランティアルームでの活動内容は知らないという人が多いことがわかる。つまり、今まで以上に Twitter や Instagram で活動内容を、発信していく必要があることが分かった。

④-1 ボランティアルームの季刊誌を知っていますか。

知っている	31.9%
知らない	68.1%

④-2 「知っている」と回答した方は手に取られましたか。

はい	80%
いいえ	20%

全体の約 70%が「知らない」と回答した。昨年度のアンケートでも「知っている」と回答した学生 29 人に対して、「知らない」と答えた学生は 173 人で「知らない」が上回っていた。

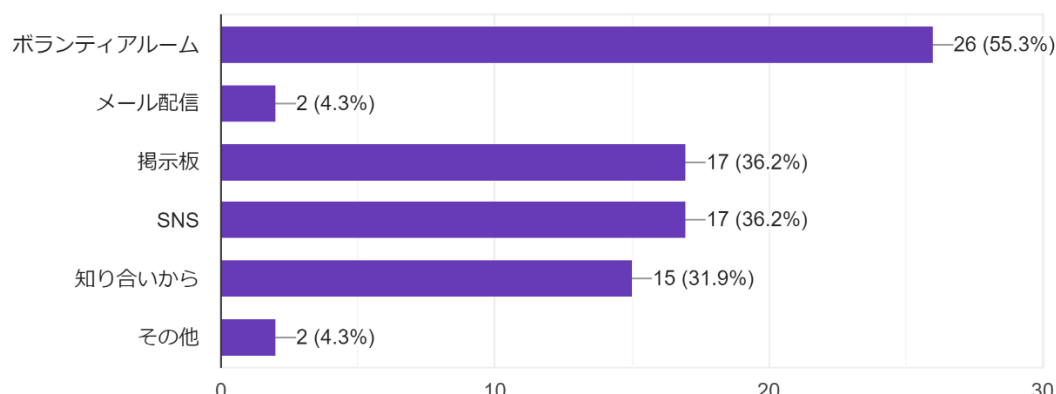
季刊誌に関しては、手に取る機会が少ないことと、発信力の低さが課題である。新年度のガイダンスのパンフレットに号外を挟んでいるが、そこまで細かく見ている学生はまれであると考え。約 30%の学生が「はい」と答えていることから季刊誌の存在は決して無駄ではないことが分かるが、オープンキャンパスや倉陵祭に合わせて号外を作成し、配布するなど新たにアプローチをしてみることも必要であると考え。

また、発信力の低さは、季刊誌を食堂や 6 号館階下で配布する活動や、新刊が発行されたときに SNS を用いてアピールする方法が案として挙げられる。食堂や 6 号館階下での配布は新型コロナウイルスの収束がつかなければ難しいが、SNS を用いた発信は、新刊が発行されたときや回収する一週間前など、何度も発信していくことが重要であると考え。

また、新型コロナウイルスの影響で、例年通りの内容では不足があるとの意見もルームスタッフ内であった。思うように活動ができない状況で、季刊誌はどのような情報を伝えていくのかを整理していきたい。

「知っている」と回答した方の 80%は、実際に手に取ってくれているので、やはり認知してもらうことが重要であることが分かった。

⑤ ボランティアルーム情報は普段どこで手に入れていますか。【複数回答可】



今回は、「ボランティアルーム」が最も多い回答となった。学生はボランティアルームを通じて、情報を得ていることを再確認し、分かりやすく発信していく必要があると考える。

次に多かったのが、「掲示板」「SNS」だった。学内掲示は様々な連絡で用いられ、学生も頻繁に確認するため、掲示板を用いたボランティア募集は学生の目に留まりやすいことが予想される。ボランティアルームでも、募集要項を印刷するのではなく、手書きの掲示を作っているが、短い時間で印象に残りやすくするためにも、手書きの掲示は続けるべきである。SNSはだれでも気軽に確認ができるもので、昨年よりも割合が高かったため、これからも分かりやすく、ボランティアに参加してみたいと思ってもらえるような発信を続けていく必要があると考える。

「知り合いから」の選択肢も多かったが、ボランティアに興味のない学生が情報を得るとすれば、友人など周りの人から誘われることで、きっかけになることが多いと考えられる。パラスポーツ体験など、一般学生が他の友人を誘いやすいような取り組みを行うことで、改めてボランティアに興味をもつことができる可能性がある。

⑥ 今年度、ボランティアに参加しましたか。

参加した	21.3%
参加していない	78.7%

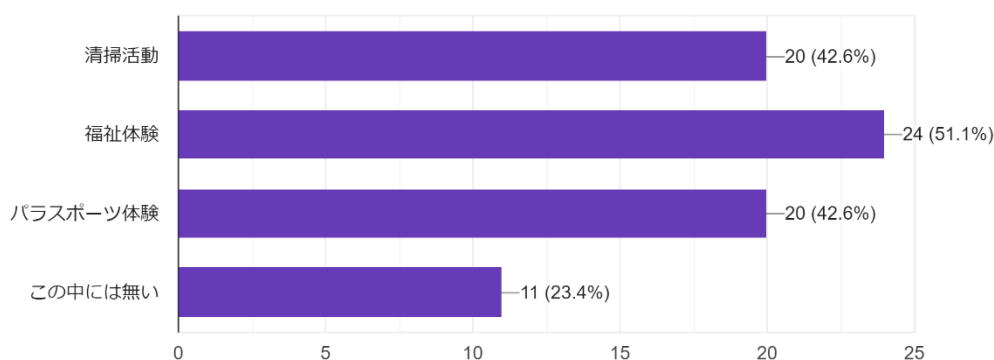
今年度は新型コロナウイルスの影響もあり、ボランティアに参加したという学生は少なかった。しかし、2割ほどの学生はボランティアに参加しており、自分で今できることを行っている学生もいることが分かった。他にも、ボランティアルームや大学を介さずに、個人で行うことのできる清掃ボランティアなどに参加した学生が多いと予想される。新型コロナウイルスの影響下ではボランティア情報を得られる手段が限られていた。学生が取ることのできる手段としては、社会福祉協議会や友人から情報を得ていたと考えられる。緊急事態宣言解除後の社会福祉協議会では、個人に向けたボランティア募集や情報の発信を行っ

ているところもあった。ボランティアに参加する意欲のある学生ならば、社会福祉協議会のホームページから情報を確認していたと考える。

友人から情報を得た学生は、上記の社会福祉協議会の情報を手に入れた学生や、個人で活動している学生からボランティア情報を手に入れたと考えられる。このように、友人・知人同士からボランティア情報を広げていくことができるような環境作りも、ボランティアルームは行っていかなくてはならない。

ボランティアに積極的な学生のサポートをしつつ、ボランティアに参加したいと思っている学生を徐々に増やしていくことが、今後のボランティアルームが取り組んでいくべき指針である。

⑦ 次の項目は、2020年にルームスタッフがスキルアップのために行っていた活動です。この中にあなたが参加したい取り組みはありますか。【複数回答可】



今回は、「福祉体験」が最も多かった。このことから、体の不自由な方や高齢者に目を向け、現状を知り、その解決に向けて動くためのきっかけづくりを行おうとしている学生が多いことが分かった。これからも福祉体験のボランティアは積極的に行っていくべきだと考える。

次に「清掃活動」「パラスポーツ体験」が多かった。清掃活動はボランティア活動の比較的参加しやすいボランティアだと感じる。街がきれいになるだけでなく、ボランティア活動の入り口となることから、これからも継続して行っていくべきだと考える。

「パラスポーツ体験」では、楽しく障がいについて学ぶことができるいい機会であり、パラリンピックなどもあり知名度が年々上がっている。障がいを身近なものであることや、障がいに対する意識の変化のために、継続してパラスポーツ体験を行っていく必要があると考える。

⑧ このような活動があれば参加したい等、具体的な意見がある方はお書きください。

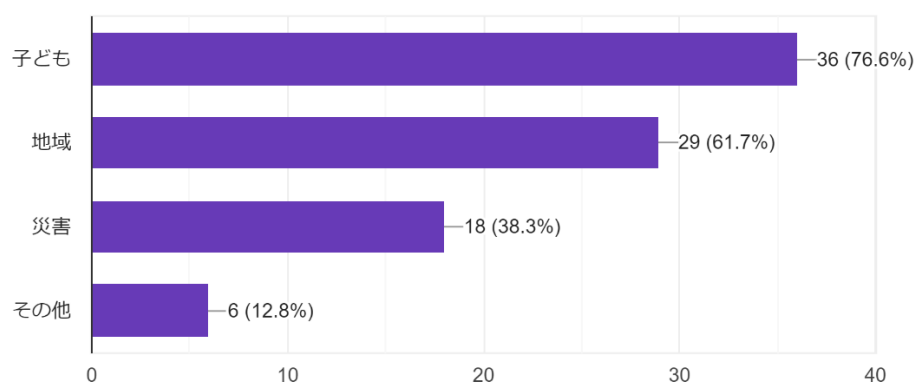
【記述】

- 子どもと関わるもの
- 点字の体験
- 学習支援
- ソーシャルゲームなどを活用したボランティア
- 地域おこしのお手伝い

学生の中には、将来、子どもと関わる職に就きたい学生が多いことから、子どもと関わるボランティアをしたいという声が多かった。他にも、地域活性化や体が不自由な方に関するボランティアに参加したいという声が多かった。こういった活動を更に行い、アピールしていくことで、学生のボランティア参加率向上につながると思われる。

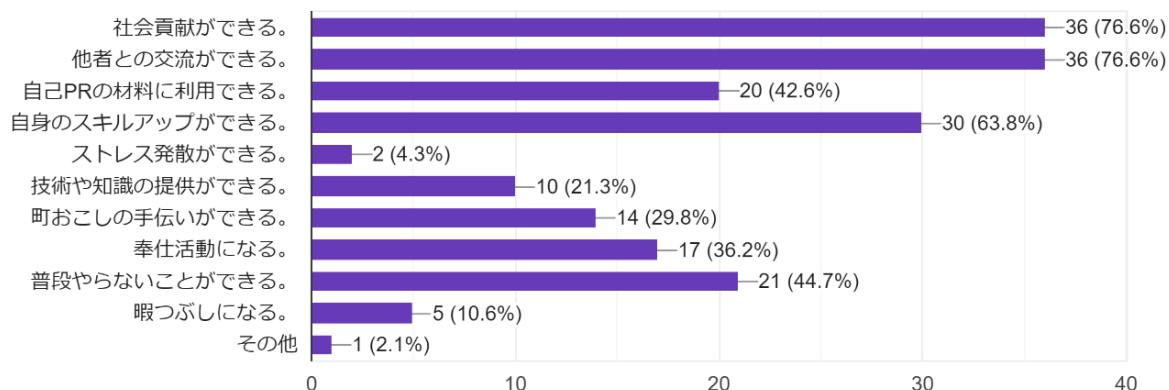
⑨ あなたが今後参加してみたいと思うボランティアの分野はどれですか。

【複数回答可】



最も多かったのが「子ども」に関するボランティア、次に「地域」が多い結果となった。⑧の項目でも触れているが、具体的な意見では「子ども」に関するものが多い。今回のアンケートでは、教育学科の学生に多く回答していただいたということもあり、「子ども」のボランティアに参加してみたいという学生が多いという結果になった。また、「地域」に関しては、講義で地域について学ぶ機会が多いことから、実際にボランティアを通じて体験してみたい学生が多いと考える。これらのことから学生の中ではこの二つがボランティアへのキーワードになっていると推測される。

- ⑩ あなたがボランティアに参加することによって、どんなことが得られると思いますか。
次の中から選んでください。【複数回答可】



最も多かったのが「社会貢献ができる」「他社との交流ができる」であった。

「社会貢献」に関しては、清掃活動や、災害支援など、ボランティアの一般的なイメージとして選択した学生が多かったと推測される。

「他社との交流」は、最近では新型コロナウイルスの影響もあり、学生同士の交流が少なかったため、ボランティアを通じて、人脈の拡大や友達作りをしていきたい学生が多いからだと考える。

- ⑪ ボランティアルームに対する意見や要望などがあればお願いします。【記述】

- ボランティアルームに入ろうとしたら睨まれた、などといったことがありました。正直雰囲気が悪いです。そんなつもりがないことは分かっていますが入りにくい雰囲気があり、ボランティアルームを活用したくても入ることができないので、入りやすい雰囲気づくりや何人かの人を配置することをお願いしたいです。

- これからも頑張ってください！

雰囲気が悪いという意見は、しっかりと重く受け止めるべきだと考える。ボランティアをする学生を増やすことができるチャンスを逃してしまうだけでなく、ボランティアルームの印象が悪いことが他の学生に伝わってしまうと、実際そうでなくても、悪いイメージがついてしまい、今後の活動に支障が出ると推測する。

激励の言葉もあるので、そういった人を裏切らないためにも、スタッフの対応の仕方などを再確認するべきだと考える。

4. 反省・まとめ・今後の展望

〈まとめ〉

今年度は、昨年度と同様に Google フォームを利用した。学生への伝達手段は、昨年度は各学年・学科に講義で QR コードを記載した用紙を配布という形だったが、今年度は各学年・学科の LINE グループに Google フォームの URL を送付する形で行った。

変更理由は、本来なら昨年同様、用紙で配布する予定だったが、急遽、新型コロナウイルスの影響ですべての講義が休講となってしまったためである。そこで、最も多くの学生に情報の伝達が可能な LINE を用いた。

しかし、LINE では確認されなかったり、誠意が伝わらないため、多くの方の回答を得ることができなかった。このことから、昨年度の、紙媒体でアンケート回答をお願いする方法をとることが多くの回答を得られることが分かった。

〈反省〉

反省点としては、対面とオンライン、どちらの場合も考えて、早いうちからの準備を行うことができなかったことである。早いうちから準備をしておくことで対応できる範囲を広げることができ、更に、回答数を増やすことができたと考える。

もう一つの反省点として、回答者の学部・学科が偏ってしまったことである。理由としては、ボランティアルームスタッフの所属している LINE グループにしか URL を送付できなかったことがあげられる。

これらの反省から来年度は班全体で協力し、内容と用紙の作成を早め、配布の許可を 12 月半ばまでには押さえておきたい。

そして、ボランティアルームのスタッフだけではなく、先生方にも協力を仰ぐことで、より多くの学生にアンケートを回答していただけると考える。

〈今後の展望〉

今年度はボランティアルームとしてあまり学生と関わることはできなかった。しかし、今回のようなアンケートの協力にも応え、協力していただいた。これは、ボランティアルームが学生からそれだけの信頼を得ているという証である。

来年度、ボランティアが募集できる状況になったとき、学生が興味を持ちそうなボランティア（パラスポーツ体験、子どもに関するボランティア等）の企画の準備をしておくことや、しっかりと情報を伝えることができるように報連相の徹底、情報発信能力の向上など、ルームスタッフ全体のスキルアップに努めていきたい。

4. 資 料

令和3年度 ボランティアルーム学生スタッフ一覧

No.	所属	学年	名前
1	文学部国文学科	3	濱口 英太
2	教育学部教育学科		奥田 陶子
3			川端 日南果
4			黒田 結規
5			坂谷 海怜
6			清水 美玖
7			杉山 瑞姫
8			袖岡 美菜
9			松岡 克佳
10	現代日本社会学部現代日本社会学科		勝又 未結
11			河俣 太一
12			須場 聖羅
13			土性 奈々香
14			行方 洸太
15			西 優一
16			増井 香苗
17			宮田 諭志
18			村上 葵
19			村林 凌樹
20			森 啓悦
21			八尾 幸哉
22	文学部国文学科	2	國分 大雅
23	文学部国史学科		河西 一成
24			鈴村 祥大
25			橋本 彩花
26	文学部コミュニケーション学科		石田 菜苗
27			伊藤 なゆた

28	教育学部教育学科		池下 日和
29			大森 萌花
30			城戸 裕介
31			小芝 実結
32			田中ゆ衣
33	現代日本社会学部現代日本社会学科		浅野 久瑠実
34			服部 花菜
35	文学部国文学科	1	渡邊 晟
36	文学部コミュニケーション学科		竹内 七菜実
37			田中 優陽
38	教育学部教育学科		井坂 安寿
39			石井 陽菜
40			大倉 すず
41			近藤 朱莉
42	現代日本社会学部現代日本社会学科		鎌田 真穂